
ノスタルジックアワー

くーたんたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノスタルジックアワー

【Nコード】

N3858F

【作者名】

くうーたんたん

【あらすじ】

裕福な家に宿る不思議な神様ヶサランパサランを失くしてしまつたゆう子は・・・。

ケサランパサランの謎

どんより曇った空から雨粒がパラパラ落ちてきて四角い木製の巨大コンテナにパチパチと音をたて始めた。

ゆう子は放り投げておいたランドセルを雨に濡れないよう手繰りよせ体育着の膝を擦り合わせた。

手にしているタッパーのふたをそつと開けると白い細かい粒子がパツとまわりに散った。

「ねえねえどこにいるわけ？なんにも見えないよ。」

クラスメートのミキちゃんがおでこをグイグイ寄せてきた。

「ほら、ここだってば！このはじっここのとこ」

白い粉はおしろいだ。

化粧品独特の甘い花のような香りが辺りに漂っている。

ゆう子がパウダーを指で寄せると、なにやら1センチ位の白い毛玉のようなものが3つ出てきた。

「これがケサランパサラン？」

ミキちゃんは不思議そうに眺めている。

「ネエこれって生きてるの？」

「うゝん。なんだろう？生き物なのかなあ。もしかしたら妖怪かも？」

ゆう子がパウダーを指で寄せると、なにやら1センチ位の白い毛玉のようなものが3つ出てきた。

昨夜ゆう子は家の人が寝静まった後、こっそり神棚からこれを持ってきたのだ。

もしなくなっている事がばれたら、今年93歳になるひい婆ちゃんなどショックでポツクリ死んでしまいそうだ。

ゆう子はちよつとブルツとした。このケサランパサランという物がなんなのか、いったいいつからそこにあるのかひい婆ちゃんに聞いたことがある。

ひい婆ちゃんは梅干しみたいな口をモゴモゴさせながら、これは家の守り神様でひい婆ちゃんが嫁にきた時には既にあったのだ。と話していた。

ミキちゃんはその話を聞くとふう〜んと、うさん臭そうにうなずいた。

「ねえ、これって何食べて生きてるの？生き物だったら何か食べるよね？」

ケサランパサランの謎 2

「このおしろい食べるらしいよ。段々少なくなるからたまにお婆ちゃんに足してるんだ。」

ミキちゃんはさらに不思議そうに

「これっていい神様？悪い神様？」

と聞いてきた。

「いい神様だと思うよ。ケサランパサランはその家がお金持ちになると増えて貧乏になると減るんだってさ。」

だから私のうちはお金持ちなんだ。とゆう子は心の中で言ってみた。

「そっか。これがいるとお金持ちになれるんだね。」

ミキちゃんが呟くのをゆう子は聞き逃さなかった。

「ね？嘘じゃなかったでしょ。もう帰ろう。雨で濡れないうちにさ。」

「

二人は「また明日ね。」と手を振って逆方向に別れて行った。

ゆう子は門の前でもう一度手提げの中を覗きこみ、タッパーがある事を確認しインターホンを押した。

重い木製の扉は江戸時代末期の物だとお父さんが話していた。

ゆう子はいつも家がヨーロッパ風のバルコニーなんかがある洋風な家だったらしいのに。」とため息がでる。

さあ。早く家族に見つかる前に神棚にこれを戻さないで。

ゆう子は、折り畳みの椅子を自分の部屋から持ってきて、手提げの中からタッパーをとり出した。

椅子の上に乗る両腕を痛いくらいにいつぱい伸ばした。

そのとたんバキッという大きな音がしてゆう子の目の前には雪のように白い粉がパアッと舞い上がった。ゆう子は身体から熱が全てなくなつたみたいに全身が冷たくなったように感じた。急いで周りに飛び散った白い物をかき集め、毛玉のような物体を探した。

こんなに高い所から落ちてしまいケサランパサランは無事だろうか？死んでいたらと思うと恐ろしくなる。

「血って出るのかなあ。」

潰れた椅子のすぐ脇にこんもりと白い物が見えた。

一つ発見！あと一つはゆう子の足元に転がっていた。間一髪でなんとか助かっていた。

ところがあと一つどうしても見つからない。

ゆう子は半泣きになりながら探したがどうしてもみつからなかった。もうこうなったら証拠隠滅する他はない。なんていつても家宝なのだ。

その時、窓から飼い犬のマルチーズのくうちゃんがキャンキャン鳴いているのが見えた。

次の日、「えらいこっちゃ。えらいこっちゃ。みんな集まれ！」となにやら興奮したお婆ちゃんが例のタッパーを高々と振り上げ居間に入ってきた。

父も母もまたか。という面持ちでうんざりしながらテレビから目をあげた。

「こ、こ、これを見てみんしゃい。か、か、神様が5つに増えとるぞ。」

父は慎重におしりを掻き分けた。

すると確かに5つケサランパサランが静かに鎮座しているではないか。

「こんな事は初めてじゃ。江戸時代に一つ増えた、と書物に書いてあるが2つとは。」

婆ちゃんの目からはすでに嬉し泣きの涙が数滴したたった跡がついていた。

「これから我が家にはきつと良い事が沢山あるという事だな。」

父は興奮気味に隣の母の膝をパンと叩いた。

母はチロリとゆう子を横目でみて

「そうですね。お婆ちゃんがよく面倒みてあげてるからかもしれないま

せんね。」

とさらに婆ちゃんが喜びそうな事を言った。

夕飯が終わりゆう子は部屋にいるくうちゃんのお尻をナデナデした。くうちゃんはくすぐったいらしくモジモジ身体をくねらせた。

そうするとお尻の10円ハゲ3つはあまり目立たないような気がするゆう子は「ごめん。」とくうちゃんにグルメジャーキーを1本差し出した。

空飛ぶモルモット

「ええ、またなの。」ミキは部屋に掛かっているカーテンの下の辺りが膨らんでいるのを見てため息が出た。膨らみが徐々に右に移動している。

カーテンの裾から白いモコモコしたお尻がペロンとはみ出した。メルちゃんは私の12歳の誕生日に買ってもらった真っ白のぷくぷくに太ったモルモットだ。近所に大きなホームセンターが出来て、その一角にまるで動物園みたいなペットショップがあった。

ペットショップに入ると右側には犬や猫の生体コーナーがあり、キヤンキヤンワンワンと鳴き声が響いている。真ん中辺りには各種フード類がずらつと並び、そのむこうに小動物コーナーがあった。

縦横2メートル位の柵の中に20匹位のモルモットがいた。それは、自由に上から人が触れるように出来ていてミキは怖々こそつと人差し指で茶色のモルモットをつついてみた。するとびっくりしたのかそのモルモットは反対側の角まで一目散に逃げていってしまった。

ミキは次のターゲットを探した。

すると、周りにいるやつよりひとまわり大きな真っ白い大福餅みたいなモルモットが目にとまった。

よくみると、そのモルモットが右側に動くとき周りにいる奴らも右に左に移動すると左に動いていてはいないか。ミキは、ははあんこいつは群れのリーダーだな。と確信した。

この群れからこの子が居なくなったらいったいどうなるのかな？見てみたい。

ミキは、爬虫類コーナーで弟と水槽を眺めている父の手を引いて柵のところまで連れてきた。

「お父さん、誕生日のお祝いにこの子買って欲しいの。いいでしょ？」父親は

「ウーン。」と唸り、隣にいた弟のタモツに

「オイオイどうする？どうせ面倒みるのはタモツだろ。お前は最初ばっかりで結局タモツが生き物係りになっちゃうからな。タモツいいのか？」と、タモツに決定権を委ねたようだ。

「えー！オレかよ。」

タモツは嫌そうな素振りだが、そんなの格好つけてるだけだとミキは見破っている。なんせ奴の尊敬する人はムツゴロウさんなんだから。

「どいつにするんだよ。どうせ面倒みるのはオレだろ？オレに選ばせろよな。」

ミキは一瞬うろたえたが、すぐにペットの好みは淒く似ていると常日頃思っていたので、ドキドキしながらも

「タモツの気に入った子でいいよ。」と返事した。

タモツはいろんな子を撫でたり、つついたりして

「よし！こいつに決めた。」と、例の大福餅を抱き上げた。

あれよあれよという間にタモツと父でカゴや餌、下に敷くおが屑がカートに積まれていった。

あれから半年たった今、やはり面倒はタモツがみている。

私は撫でたり抱っこしたりするだけなので、メルちゃんも弟を飼い主と認識しているようだ。

弟がプラスチックボックスに近付くと、

「プイップイプイッ」

と、まるで子豚みたいに鳴き声をあげる。それが可愛らしくてたまらないらしく、タモツは

「メルちゃんはいいいこでちゅね。」と溺愛している。

最近はモルのおやつとかいうビスケットみたいなものを買い込み、芸を仕込んでいる。

「家のモルモットはお手もお座りも出来るんだよ。」

と、友達のゆう子ちゃんに話したら、

「それは淒いよ！ネズミが芸するなんて。テレビに出られるかもよ。」

と、大興奮されてしまった。
やはりリーダーだけあって相当頭いいんだな。と妙に感心してしまう。

そんな賢いメルちゃんだがここ最近、朝弟が餌をやり私に私の部屋に来ると衣装ケースから脱走して部屋の隅でのんびりしているというのだ。

衣装ケースは透明のプラスチック製でツルツルしている。

高さも深型タイプなので50センチメートルはある。

絶対よじ登るのは無理な深さだ。

ではいったいどうやって脱走するというのだ。

ケースの中をくまなく点検したが、穴もあいてはいなかった。

真相を探るべく、タモツとミキは徹夜して張り込みを開始した。部屋の電気を消してそつと物影からのぞいていると、カタツカタカタカタツとケースが揺れ始めた。

ケースは徐々にガタガタと激しい振動に変わっていった。振動が物凄く早くなりミキとタモツは隠れている事も忘れ身を乗り出した。揺れがマックスまできたとき、ベンツ！と大きな音がして白い餅みたいな物体が遠心力で凄い勢いで飛び出してきた。それは空をきり、ミキとタモツの遙か頭上をポーンと飛び越えベージュ色のカーペットの上に着地した。「メルちゃんスゲー。なんであんな事思いつくんだろ？」タモツの驚きなんてなんのその。

メルちゃんはもつと凄い事を始めた。

メルちゃんはおもむろに玄関に向かってテチテチ歩いていくと、昔飼っていた猫の為の小さい出入口から外に出て行ってしまった。もちろんミキとタモツはそつと後をつけていった。

メルちゃんは豊満な身体をブルツと揺すると今までの緩慢な動作からは信じられないスピードで走り始め、うちの隣の老夫婦が耕して

いるキャベツ畑の中に消えた。

しばらくすると、さらにデブった感じのメルちゃんが身体に朝露を
いっばいつけて戻ってきた。よくみると、口の周りが緑色ではない
か。二人に見つかったのに気付いたのかメルちゃんはずちのなかに
戻って来ることはなかった。とうとう野良モルモットになる決心を
したのだ。

今まであんなになついていてくれたのに、人間が捕まえようとする
とダッシュで逃げる。そのくせ

「メルちゃん。」と呼ぶと

「プイプイッパイ。」と返事するのだ。あんなに利口なメルちゃ
んだ。きつと遅く生きていくことだろう。

憂鬱な透明人間

そろそろタモツのクラスメートの自己紹介も中盤に差し掛かり、自分の番が近くなつたので心の中で言う事を整理した。

「ええと……。最初が出身の小学校だろ。次が入りたい部活だよな。」
先生がタモツの前の席の子の名前を呼んだ。

「次は笹川だな。笹川実。」
「……。」

「笹川、お前だぞ。」
クラスみんなの視線が実に集まった。実は分厚い唇をポカンと開けて、結構大きな瞳には何も写っていないようだった。
先生は大きいため息をつく。

「篠崎、篠崎タモツ。」俺の名前を呼んだ。
今の出来事でさっきまでのリハーサルがすっかり頭から抜け落ちてしまった。それからというもののアイツは新入生の宿命、名前の順つてやつで俺と組む事が多かった。

体育の時間、かならず番号を言わせられる。

「端から番号！」体育教師の無駄におっきな声が体育館に響く。
「いち！にー！さん！しー！番号はスムーズに10までいった。俺は12番。実、今日こそ小さい声でいいからじゅーいちって言うてくれよ。」

俺の願いも虚しく案の定、実のだんまりだ。俺は3秒待つてじゅうに！と言ってやった。こんなやつと俺はなんと3年間ずっと同じクラスだった。

しかも出席番号も変わる事なく俺の前だ。 というわけで俺の中学校生活は実を抜きには語れない。
うちの姉貴が一つ上の学年にいるがやつのあだ名は透明人間だそう
だ。

そんな事いうやつらは本当にあいつの学校生活を知らない連中だ。

透明人間っていうのは俺みたいになんの個性もない普通のやつらの事だろう。俺は実がほんとにどんなやつなのか知りたかった。

まず声を聞いた事がない。

目はいつも虚ろだ。

口は閉まっている事がない。

いわゆるアホ面ってやつだ。ところがなぜかやつは人気者なのだ。

それには理由がある。この前の中間テストの事だ。

一時限目は数学。俺は必死で勉強した。姉貴と賭けをしたからだ。前から欲しかったゲームソフトを姉貴のミキがとうとう買ったのがなかなか俺に貸してくれない。

成績悪いのにこんなもの貸したら親に叱られるというのだ。

そんなに貸して欲しければミキより順位高くしろ。だと！

腹はたつがもつともなので死ぬ気で頑張った。ウゝ周りのシャープンの力チカチいう音や消しゴムをガシガシこする音が気になってきた。ふとまえの座席をみると実がテストの裏面にアニメのキャラクターをえらく上手に書いていた。

まさに一心不乱という感じだ。さすが実！大物だぜ。俺は妙に嬉しくなった。実の知らない一面を見たきがした。これを知ってるのは俺だけ。みたいな優越感がたまらない。

なゝんて見とれてる場合じゃないんだった。俺は小心者だからテストを棄てて優雅にお絵描きなんてしてられねえよ。

無情にも先生が

「終了！はいペンを置いて。」というが早いか一番後ろに座ってる委員長の菌部がすかさずテストをひったくっていった。あの長いストレートの髪を引っ張って取り返したくなる。

次の日、早速昨日の答案が帰ってきた。

テストも座席順で返される。

「笹川！タラタラ歩かんとはよ取りにこんかい。」なかなか席を立たない笹川の椅子をタモツは下からコツコツ上履きの先で叩いてや

った。

先生は実の答案の裏面をみんなに見えるように高々もちあげた。

「ほれ！これは実が描いたんだぞ。上手いもんだなあ。」

みんな一斉にその絵に釘付けになった。

それはとてもテスト時間内に描けるような代物ではなかった。

多少マニアックではあったが細かい描写で背景まで描いてあり、みんなを唸らせるには充分の代物だ。その時、授業中でもマンガ読んでるやつらが、

「あゝあ実はいいいな。それだけ才能あればプロで食っていけんじやねえの。」と話しているのが聞こえた。実は自分の事だというのはまた口をだらしくあけて呆けているばかり。

先日、授業参観があった。

入学して初めてということもありほとんどの親が出席した。みんな親たちはいかにも学校にくる時の格好で、少し地味目に控えめファッションできめていた。

そんな中で、真っ赤なスーツに金のネックレス。いかにもお水系のお姉様みたいな美人が茶髪のロングヘアーを気だるげにかきあげていた。男子達は、

「オイオイ！あの美人、誰の姉ちゃんだよ。」と探りあっている。

その美人が、つかつかと俺の方に歩いてきた！あゝいい香り。

俺が濃い香水のかおりにクラクラしていると、真っ白い手がのびてきて俺の前の席の実の肩をポンポン叩いた。

「実……。お母さん今日は遅くなるからテーブルの夕飯、温ためて食べてね。」！？

ってオゝイ実の母ちゃんかあ？

クラスがザワザワしはじめた時、前の戸がガラリと開き先生が入ってきた。

「今日は、英語のスピーチを発表してもらいましょう。簡単でいいからね。なんの食べ物が好きか、とかどんな事がやりたい。なんて

いう感じでね。では、名前の順でいこうか。赤澤からだな。」
はぁ〜出たよ。名前の順ね。ハイハイ！

こんな時はちょうど真ん中位に順番がくる自分の苗字に感謝する。
同時に凄くワクワクしてきた。

実のやつどうするつもりだ？

今日こそ声きけるかも？

まさか喋れないわけじゃないよな〜。先生何も言っていなかったし。
そっぴいえばあいつだけ出身小学校分らないんだよな。引越して
きたのか？

なんて自問自答してるうちに実の番が回ってきた。

実はゆつくりと立ち上がり目をキョトキョトさせている。

おお！いつもと様子が違うじゃん。あいつ動揺してるせゝ。

実の口が魚みたいにパクパク動いた。

みんなジ〜ツと実の動向に注目した。

「……………」

「実、頑張れ！」

蘭部が声をかけた。

蘭部はいつも実をかまっている。

お節介な女ってやだね〜。

自分の事、親切で優しく美人だと思ってるんだろうな。

「……………」

俺はそつと振り返った。実の母ちゃん笑ってるし！

しかも爆笑したいの我慢してる？！

うちの母ちゃんなら青筋たててるとこだよな。さすがに実を産んだ
人だけある。妙に感心してしまった。

周りの母親たちは皆アラ困ったわねえ。

といった顔つきで、同情的な視線を交わしあっている。先生は苦笑
いで

「笹川、座っていいぞ。」

「じゃあ篠崎。」

俺はハイハイと立ち上がり好きでもないのに

「アイライクベースボール。」なんて無難に終わらせた。

ああ俺ってつまんないよな。

でも普通に生きるっていうのは楽だからな。まだ中学生でこんなこと
と思ってる俺はオヤジかよ。授業参観が終わり、親達が帰って行く
のを眺めていたら担任が実の母ちゃんを呼び止めていた。

俺はこりゃあ面白くなりそうだ。と思い、友達を上手くまいてあと
を付ける事にした。担任と実の母ちゃんは理科実験室に入って行
った。

担任は理科の教師なのだ。

俺は校舎の外側にまわり、スニーカーを脱ぐと理科実験室の前の廊
下を足音を忍ばせながらソロソロと歩いた。オイオイ先客がいるよ。
園部かよ。

俺は園部の髪をピンピンと引っ張った。

すごいひきつった顔でゆっくりとこっちを向いた。

「な〜んだ。タモツかあ。驚いたあ。びっくりさせないでよ!」

タモツって呼ぶんじゃね〜よ。

と心で叫んで

「お前何やってんの?」

と口パクで言った。

「あんたと同じ事。」口パクで答えてきた。

オッ結構聞こえるじゃん。

「お母さん、今日の様子をみてどう感じましたか?息子さん学校で
は全く話さないんですよ。もう入学して随分たちます。おうちでは
どんな様子なんですか?」

「どうって…。普通ですよ。妹にも優しいですし、勉強はあまりし
ませんがお喋りでつまんないオヤジギャグとか言っちゃったりして。」

実がオヤジギャグ？！

俺と蘭部は思わず顔を見合わせた。

「この前のテストの答案。見ましたか？」

「ええみましたよ。あの絵は小さい頃から上手だったんですよ。

先生、あのこつたら全部の教科の答案に漫画書いてましてね。ストリーがなかなか面白かったから誉めてあげました。」

「ハアよくあれだけ書く余裕がありますね。正直、私も驚きましたよ。なんせ学年1位ですからね。」

え？！今、学年1位って言った？

蘭部の顔がパアツと輝いたのを俺は見逃さなかった。

「しかし、なぜ実君は学校では喋らないんですかね？」

そうそう、そこだよ！先生よくぞ聞いてくれた。

「私も分かりません。けど、もしかしたら…何かの実験かも？」

「ハア実験ですか。いやぁ私みたいな平凡な教師には彼みたいな天才の気持ちはよく分かりませんな。博士は今どちらに？」

「またエジプトですよ。ほんとめったに帰って来ないですからね。

ほとんどうちは母子家庭です。」ニツコリ笑った顔がまたさらに綺麗だな。

思わず鼻の下がのびてしまった。

パシッ！痛いなんて蘭部が叩くんだよ。

全く女ってやつは妬きもちやきな生き物だ。

「実君は将来やはりお父様のような考古学者になるつもりですか？」

「どうでしょう？でも実はどちらかというと科学者向きかもしれないませんね。理科とか大好きなんですよ。」

「夏休みの自由研究が楽しみですね。IQ200の天才がなぜこんな田舎の学校に？」

「実にノビノビ暮らさせたかったです。東京では父親が有名だったこともあって実は窮屈だったんじゃないかしら？ここは私の生まれ故郷でもあるし、森や田んぼを実に肌で感じて欲しかったです。」

「なるほど…。子供時代は一度きりですからね。」

「先生、心配いりませんわ。私実のこと信じてます。」

「分かりました。彼が喋らないのもきつと理由あったの事でしょう。見守っていく事にします。」

おっと。2人が出てくる気配だ。

「じゃあな！」 蘭部と別れて俺は部活に戻ったがずっとさっきのやり取りが頭から離れなかった。 次日、蘭部は早速実にとわりつきはじめた。 「ねえ笹川君、今度の遠足男子2人女子3人のグループでしょ。私達同じグループよ。ヨロシクね。」 クネッおいおいなんだよそのさいこのクネクネ攻撃はよ！

俺はこういう女が一番嫌いだ。

遠足かあ行きたくねえな。 蘭部に笹川、あとは瀬名に狩野だよな。なんせ笹川と蘭部が一緒だとしばらくはこのクネクネ攻撃を間近で見続けなくてはならない。

考えただけでゲッソリしてしまう。

案の定バスの中ではしきりに蘭部が笹川に話かけていた。

「ネエネエ笹川君、このお菓子美味しいよ。ハイあげる。」

「……。」

実の手をとって無理やりチョコを渡しているウザイ、ウザ過ぎる。その時奇跡が起こった

「うるせー。クソババア」

「誰？今だれが言ったの？」

「み…み…み…」 みんなの視線が実に集中した。

しかし実は例の分厚い唇をポカンと開けてポツとバスの外の風景を見ていた。

「な〜んだ。タモツかあ。なによ、クソババアって！」 蘭部はブリブリ怒っている。

俺は弁解する余裕もないほど驚いていた。実の声初めて聞いた。スゲー。

よく実を観察しているとその直後、実は確かにしまった！という顔をした。

3年間一緒にいて発した言葉はその一言だけだ。

結局、みのるが実験していたのか？それとも実流のゲームだったのかは分からない。

実は卒業式に来なかった。急ぎよ親の都合で引っ越したらしい。

あれから20年がたった。

今晚、中学校の同窓会がある。

昨夜園部からTELがありどうやら実も来るらしい。

いったいどんな男になったやら。この報告は後日ゆっくりと…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3858f/>

ノスタルジックアワー

2010年10月8日13時51分発行